

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.40

2022.7.1

馬郡観音「日露戦争忠魂碑」

傾いた忠魂碑のなぞ

馬郡観音跡に、日露戦争で戦死した村松和十を祀る日露戦争忠魂碑が佇んでいる。

平成二十八年の熊本地震の際には、倒壊の恐れからこの碑の傾きが問題視され、地元でその処遇が論議されたが、「地震や劣化による傾きでは」「旧陸軍の敬礼姿勢では」「宇治平等院の死者の霊を迎える『来迎菩薩』の前傾姿勢に擬えたのでは」等々の推測に留まっており、傾きの原因究明の調査が期待される。
明治三十八年建立以来数回の地震にも耐え、破れた玉垣内に立ち続けている忠魂碑、本稿ではこの碑文に着目し、由緒来歴を探りたい。



馬郡観音跡の忠魂碑
(高さ310cm)

格調高い碑文 なぞ?

石碑は「日本造船の父」と称えられる海軍中将赤松則好の篆額「忠魂之碑」を掲げる。碑文は「剣は利なれば即ち刃を欠く 人の鋭なればまたその災禍を免ずること能わず村松君のごとし あに此の比あらざらんや」と文学的格調の高さをもって始まる。この撰文は山本湛翠であり、「今芭蕉」と称えられ俳人で有名な松島十湖の高弟である。

国家の興亡を担わん

続く碑文は簡明直截で「明治三十四年十二月豊橋歩兵十八連隊入営、越て三十七年日露国交断絶 砲火相見也」と続き苦闘する転戦の状況が詳述される。

「従軍し清国に赴き戦いに參與す。三十七年六月十四・五日の得利寺龍王廟の戦闘から、七月

めたたえ、隆々ここに青史を飾らん。聊か勲績を勤みて もって千歳に伝えん
明治三十八年十一月 遠陽

碑文からはひたすらその死を悼み惜しむ心情が伝わってくる。

昭和の戦後、進駐軍の占領政策、米ソ冷戦の激化によって多くの戦争記念碑は有為転変を辿った。その中であって観音堂の忠魂碑はなぜか無事であった。

この馬郡観音は鎌倉期の紀行文『東関紀行』に登場し、古来より東海道を往来する旅人から篤く信仰され、江戸期には江戸の商人や庶民によって『大般若経』が奉納され、縁日ともなると夜店も出て、近隣の善男善女で賑わう信仰の中心であった。

歴史の証人石造文化財の保存を

和十の忠魂碑は、和十が生まれ育った集落の人々によって建立され、祈りの中心であった観音堂跡にあることに歴史の意味と価値があると考えられる。地域社会の歴史を知る上で貴重な石造文化財であり、これを後世に伝えるためには地域社会の人々の関心を育み、地震や災害からの安全対策を施すことが大切である。
ウクライナに想いを馳せつつ

(鈴木理市)

七 日 八 日 九 日 蓋 平 中 略 九 月 三 日 遼 陽、十 月 九 日 采 城 津 等 々 と 各 地 を 転 戦 し た の ち、沙 河 の 会 戦 で 戦 死 し た こ と を 記 す。「十 月 十 一 日 沙 河 の 大 会 戦 に あ た り、敵 弾 来 た り て 胸 壁 を 貫 き、遂 に 陣 頭 に 於 い て 歿 す」
勲 績 を 勤 め て 以 て 千 歳 に 伝 え ん
「嗚 呼 悼 む べ し 惜 し む べ し な り。
君 仮 令 骨 異 城 に 埋 め る と い え ど も、
英 靈 と し て 長 く 邦 家 を 護 り、名 を ば

三方原用水が本格的工事

三方原用水は今「国営三方原用水二期土地改良事業」として、グレードアップのための大規模な工事が行われている。私達の周りでもあちこちで工事の一端を見ることが出来た。日頃より大変ありがたいと感じているので、この機会に三方原用水について、概要と工事の目的を確認したのでまとめてみた。

三方原用水の概要

三方原用水は大変大規模な施設で、篠原はその南端に位置し、よく一緒に加えていただいた感さえる。秋葉ダムから取水し何と約50 kmにも離れた海辺のこの地区にまでも施設されているからである。

- ① 昭和35年度から始まった国営三方原用水事業は、農業用水の他、工業用水、水道用水を供給する総合的開発事業（42年通水開始）
- ② 農業に不向きな三方原台地の開拓は、先人達による挑戦で農業用水の安定供給は悲願であった。
- ③ 三方原用水の維持管理は、土地改良区の下で行われている。篠原地区は「篠原舞阪南部土地改良区」である。その運営は改良区内に土地を所有している組合員の賦課金等で賄われている。

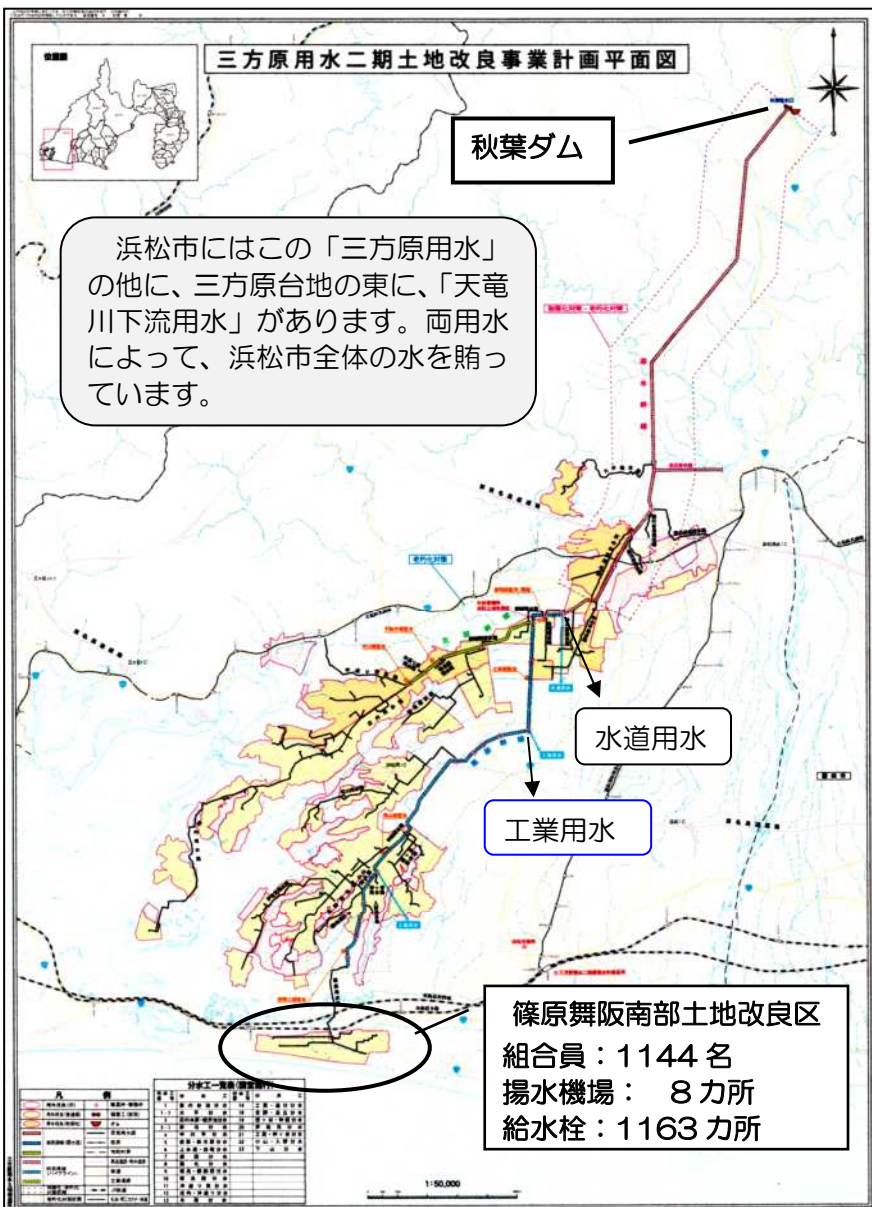
今回工事の目的

- 予定工期は2016年～2024年の10年間
- ① 老朽化対策（既に50年以上が経過）
目地の漏水改修、水管の材質変更等
 - ② 高度な用水管理（必要時水が出ない等）
調整池を新設、遠方制御システム導入等
 - ③ 耐震化対策（大規模地震への備え心配）
コンクリート補強等での耐震化対策

調査しての所感

この大事業は上流から末端まで、国、県、市と地元との連携で行われていることが良くわかった。50年以上も経過すると巨大地震が無くて、愛知県明治用水頭首工のように何が起るかわからない。事故が発生した場合その影響は計り知れない。間に合って良かった。

（山下勝彦）



篠原のサツマイモについて

篠原甘藷の発祥について(コトナギ.ミナ参照)

1. 原産地は南メキシコ及び中央アメリカ
16世紀にはスペインで栽培されていた。そしてインド、中国を経て日本に入ってきたのは1705年頃、薩摩(鹿児島県西部)だと言われている。そして静岡県で栽培が始まったのは1770年3月からだと言われている。

2. 篠原地域との適合性

サツマイモは熱帯の原産であるので生育期間(4カ月)を通じて適温は高い。地温10℃だと生育せず、35℃位が生育の最適温、耐乾性は強く、土壌は砂土から粘質土まで適応範囲は広いが、夏の篠原は最適である。

早掘り甘藷として高知県等で選抜された高系14号が篠原で導入されたのは昭和29年。

3. 収穫高の変遷と考察

年度毎の収穫高(単位 t 四捨五入)

年度	出荷高	出典
明治34年	891	篠原村誌 (大正2年)
44年	518	
大正13年	89	篠原村誌続編 (昭和25年)
昭和25年	1,343	
40年	1,496	ｽｰﾄﾞﾎﾞﾄ (昭和47年)
45年	2,842	
平成28年	451	とびあ浜松 農協 (各年度)
令和元年	269	
2年	246	
3年	252	

収穫高を断片的ではあるが、手に入る資料から上の表のように並べてみた。

古い時代から収穫されているサツマイモであるが、昭和45年頃がピークに最近急減少し続けている。その原因は収穫時期が真夏の上方力の割に収益がないことが考えられる。

バイオ苗(ウイルスフリー苗)について

ウイルスフリー苗の導入は平成4年から導入されている。その要点をまとめてみる。

1. ウイルスフリー苗の導入の経緯

現在は、バイオ苗を利用しているが、昭和50年代までは全国的に種イモによる苗育成であった。当時篠原でもイモの表皮が横シマ、さめ肌症状なる常状粗皮症が発生して、商品価値を落としていた。

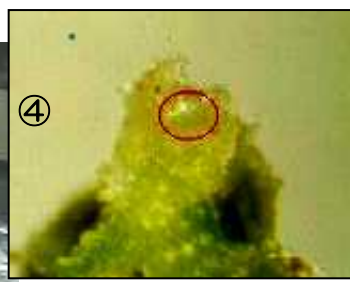


バイオ苗のイモ 病気のイモ

そんな折、昭和58年に国の研究機関でこの原因がウイルス病であることが判明されて以来、茎頂培養によるウイルスフリー苗利用の取組みが行われるようになった。成長点培養とも言う。

2. 生長点培養

手順としては①優良な親イモから伸びる芽を採ってくる。②先端のみを切取る。③流水ですすぎ殺菌する。④芽の先端から生長点(20〜30mm)を切出す。

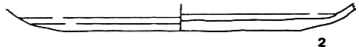






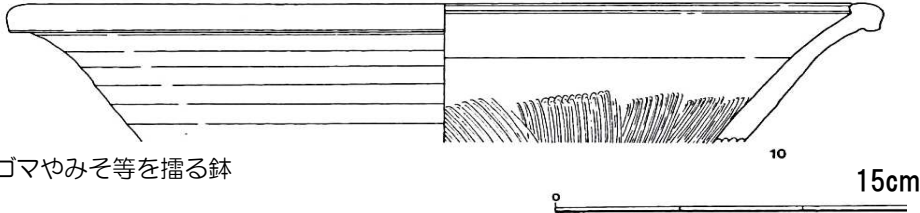


⑤切出した生長点を培地に植え付ける。⑥培地に含まれる栄養素を吸って成長点から芽が伸びてくる4カ月の培養。



⑦試験管の中で成長した芽を取り出し、伸びた芽を1節ずつ切り分け、新しい培地に植付ける継代培養
⑧40日間の継代培養(発根)⑨1株ずつ培養土に植付ける順化⑩これが成長してバイオ苗となりとびあ農協経由で農家へ届けられる。
サツマイモは篠原特産玉葱の裏作であるが、バイオ苗で品質は保証出来る。いっそう自慢できる篠原のサツマイモに育てていきたいものだ。
(山下勝彦)

篠原仲村遺跡の 出土遺物

世紀	出土遺物の概略図と要約 (寸法は同倍率)	
8	<p>須恵器盤 すゑきばん 古墳時代から平安時代にかけて日本で生産された陶質土器</p>	
13	<p>山茶碗 やまぢやわん 平安時代末から室町時代にかけて東海地方で生産された無釉陶器</p>	
	<p>山皿 やまざら 東海地方特有の無釉陶器で、腕と共に見つかる小皿を山皿と呼ばれることがある</p>	
15	<p>内耳鍋 ないじなべ 火の上に吊るすため、内側に輪が2か所ついている鍋</p>	
	<p>羽釜 はがま 羽がついた炊飯用の釜</p>	
17	<p>土師器小皿 はじまこざら 弥生土器の系統を引く素焼きの土器</p>	
	<p>志野小皿 しのこざら 岐阜県を代表する美濃焼の一種</p>	
18	<p>美濃・瀬戸産の播鉢 すりはち ゴマやみそ等を播る鉢</p> 	

篠原町仲村遺跡の出土遺物
浜松市教育委員会発行の『篠原町仲村遺跡』より、出土遺物について取り上げた。

剥片や子片を除く出土遺物を年代毎に並べたが、その遺構の時期については17世紀以降ではないかと判断されている。

篠原地区で初めての発掘調査であるが、縄文・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸の各時代の遺物が出土し、地理的に言う砂提列上の地域史に新たな知見を提示することが出来たと報告書は結んでいる。

たまたま宅地造成工事が計画されていたため、試掘調査を実施してこの遺跡が発見された。そこで市道移管予定部分を対象に平成17年本発掘調査を実施したもの。費用は土地所有者の鈴木重世氏が負担されたそうである。

調査しての感想

調査のきっかけは、「仲村遺跡」が私の住んでいる国方にあるようだと言いましたが、近所に住んでいる人達に聞いたところ誰も知りません。それではと自分で調べることになりました。まずインターネットで調べると確かに載っていました。それに興味が湧き、もっと詳細に調べようと市立可新図書館を訪ね、この報告書に出会うことが出来ました。私達の住んでいるこの地から、このような遺跡が発掘されたとは驚きでした。(鈴木坂江)

浜風会会報第40号
篠原協働クラブ同好会「浜風会」
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 委員長 山下勝彦
鈴木忠 鈴木理市
藤田博辞 山中道弘
発行責任者 山下勝彦
発行 令和4年7月1日